



## まちづくりは、ひとづくり。 — 「球都桐生」が目指す地域の未来 —

桐生市 スポーツ・文化振興課

このたび、「球都桐生プロジェクト」が群馬県まちづくり功労者表彰を受賞しました。

これまで本プロジェクトに関わってくださった企業、団体、学校、市民の皆様へ、改めて感謝申し上げます。

桐生市は、人口減少や少子高齢化、若い世代の流出など、地方都市に共通するさまざまな課題に直面しています。

こうした課題は、一つの部署、一つの施策だけで解決できるものではありません。行政の分野を越え、さらに行政と民間、地域がそれぞれの力を持ち寄り、新しいつながりを生み出していくことが必要です。

その一つの挑戦が、2022年に始まった「球都桐生プロジェクト」です。

桐生には100年以上にわたって受け継がれてきた野球の歴史があります。この地域資源を、単に「保存する歴史」とするのではなく、まちの未来をつくる力として活かしていく。そんな発想から、民間事業者の提案を受け、公民連携による取り組みとしてスタートしました。

これまで「球都桐生の日」の制定、球都桐生歴史館や野球ラボの開設、各種イベントなどを進めてきましたが、このプロジェクトの意義は、個々の事業そのものだけにあるわけではありません。スポーツを入口に、行政、企業、学校、地域団体、メディア、市民など、これまで接点の少なかった人や組織がつながり、新しい取り組みが生まれる。その「地域のプラットフォーム」が育ちつつあることに、大きな価値があると考えています。

行政内部においても同様です。スポーツは、健康、教育、文化、観光、産業、広報、シティブランディングなど、多くの政策分野とつながっています。「球都桐生」を一つの触媒として、組織の壁を越えて連携することで、従来の行政施策だけでは生まれにくかった新たな価値を創出できる可能性があります。

そして今、桐生市が次の段階で大切にしたいのが「ひとづくり」です。まちをつくるのは、最後は人です。特に、これからの桐生を担う子どもたちや若者が、相手を尊重し、ルールを守り、仲間を信じ、失敗を恐れず挑戦できる環境を地域全体で育てていくことが重要です。その土台となる価値観の一つが「スポーツマンシップ」だと考えています。

スポーツマンシップを競技の中だけにとどめず、学校、家庭、企業、地域へと広げていく。それは、子どもや若者が育ちたいと思えるまち、そして女性や若者から「暮らしたい、働きたい、関わりたい」と選ばれる桐生市をつくることにもつながっていくはずです。

今回の受賞をゴールではなく、新たなスタートとして捉えています。「球都桐生」で培った公民連携の仕組みを、スポーツの枠を越えた地域課題の解決へとつなげ、桐生ならではの地方創生のモデルへ育てていく。これからも市民の皆様、地域の皆様とともに、「まちづくりは、ひとづくり」という視点を大切に、一歩ずつ挑戦を続けてまいります。



様々な野球団体の垣根を越えて野球の未来を作るプロジェクト「球心会」代表の王貞治氏が球都桐生プロジェクトを視察（2025年8月26日）



2023年のワールド・ベースボール・クラシックで侍ジャパンの監督を務め、チームを14年ぶり3度目の世界一に導いた栗山英樹氏を招いてシンポジウムを開催（2023年9月6日）



市内の多く企業の賛同を受け、東武線新桐生駅の球場化装飾を実施。球都桐生プロジェクトのスペシャルアドバイザーを務める斎藤祐樹氏も参加（2025年3月27日）



JR桐生駅の構内に人気野球漫画「ダイヤのA（エース）」／講談社の主人公、沢村栄純投手のモニュメント像を設置（2025年9月10日）

